ロシア史研究会 ISSN 0919-990X

---

# ロシア史研ニューズレター

ОБЩЕСТВО ИССЛЕДОВАТЕЛЕЙ ИСТОРИИ РОССИИ

*No. 105* *April 2017*

---

# 2017 年度大会は 10 月 14 日～15 日 東京大学駒場キャンパスにて大会開催

# 自由論題・パネル報告募集

**今年度のロシア史研究会大会は 10 月 14 日（土）、15 日（日）の二日間、東京大学駒場キャンパス（21 KOMCEE）で開催されます。**

**共通論題提案は既に締め切られておりますが、自由論題報告・パネルの応募締め切りは 5 月 5 日（金）ですので、題目、概要を添えて事務局鶴見（shukran_afwan(at)hotmail.com ※(at)を@に置き換えてください）宛にふるってご応募ください。**

**また昨年度より大学院生等による自由論題報告に対する交通費補助制度を設けております。詳細は 5 頁をご覧ください。**

**（会場となる東京大学駒場キャンパス・21 KOMCEE）**

【ロシア史研究会 12 月例会レポート】

金山浩司（東海大学）

## 和田春樹『スターリン批判 1953－56 年：一人の独裁者の死が、いかに 20 世紀を揺り動かしたか』（作品社、2016 年）合評会

2016 年はスターリン批判が行われてから 60 周年にあたっている。この記念すべき年に作品社より公刊された和田春樹『スターリン批判 1953－56 年：一人の独裁者の死が、いかに 20 世紀を揺り動かしたか』（以下、和田書と略記）の合評会が、去る 12 月 3 日（土）、東京大学本郷キャンパスにて、著者を囲む形で行われた。評者は二名、伊東孝之と河本和子の両会員であった。30 名近い出席者があり、熱気にあふれた討論の場となった。以下、報告者の耳目（主観）に映った当日の様子を述べる。

著者である和田春樹より、本書のテーマが自身のパーソナル・ヒストリーにも大きく関連していることなどの簡潔な報告があったのち、伊東会員による評が続いた。伊東は、諸人物を中心に描き出した、およそこのテーマについてこれ以上精査することが考えられないほどの調査に基づいた、第一級の歴史書、と和田書を位置づけたうえで、スターリンの後継者たち各々の改革政策を整理した。そのうえで伊東が注意を向けるのは、東欧諸国とりわけポーランドと、ソ連との政治的状況の相違である。ポーランドでは批判勢力が共産党内外に多くいたために政治犯や古参党員、歴史家といった集団はさほど重要性を持たなかったのに対し、和田書が描くように、ソ連においてはこれら集団が改革の原動力の一つとなっていることは興味深い。また、ポーランドでは様々な利益集団の動向への着目が必要となってくるのに対し、ソ連では一部を除き、これら集団は不活発である（さほど検討に値しない）。政治制度についても、ポーランドとは異なりソ連の場合、これを扱うことによって明らかになることは少ない。和田書の「アクター中心」の歴史叙述から伊東が受けた印象はこのようなものであった。国際関係については、1956 年の東欧変動への対処の仕方について中国とのずれが喚起されるとともに、この点に関しての中ソの駆け引きに謎が残ることも指摘された。また、ソ連の支配体制とはどのようなものであったかの解釈についても、伊東はもろもろの説を挙げつつ言及した。

続く河本会員の評は非常に多岐にわたったが、のちの討論との関連で、また報告者の関心から、興味深かったのは以下の諸点である。和田書が、保守的な党官僚とそれに対する正義を求める古参党員あるいは抵抗する知識人たちという対立軸をくっきり出しており、このことが叙述の情緒性とも相まって面白さ・読みやすさにつながっていること、ベリヤというアグレッシブな個性が周囲そして国民に与えた印象の強さ、歴史家たちが事実の復元を打ち出すにあたっての動機（和田書では、彼らは「歴史の歪曲の罪」を犯したことの反省に促されて動いていたとされるが、それだけといえるのか）、多くの学問分野がイデオロギー的批判を受ける中、分野によってはさほど批判を受けなかったものもある（法学・経済学など）が、その違いはどこから来るのか、階級闘争激化論についてのコラムがあるが、これは 1937 年というよりは 1929 年に出てきたものととらえたほうがよいのではないか。

両評者に対する著者からの応答ののち、フロアからの質疑応答に移行した。報告者の印象に残った議論は、たとえば以下のようなものである。ベリヤという人物の興味深さが改めて浮き彫りにされた。彼の改革路線は、弾圧者としてのみ彼をみる見方から離れて評価されねばならない。こうした感想に対し、著者自身から、ベリヤは収容所経済を完成させた要員であるが、

ある時点で、これが経済的にみて非効率であることに気づいたとの応答があったほか、スターリン生前にも改革の機運は一時あったことがフロアの別の発言者から指摘された。議論はそこから、和田書で扱われている政治囚の抵抗が、時が下ると印象の薄いものになってしまっていることの指摘に移り、釈放された囚人のもった社会的影響が探究すべきテーマであることが示唆された。このほか、スターリンの側近たちのまとまりぶりがどの程度だったかについても議論された。スターリン末期にすでに不安定な、流動的な状況がみられたことがフロアから指摘されたが、これは著者によればスターリン自身が死後の見取り図を有していなかったことと関連しており、実際死後、側近グループも解体していったという。それに対し、死後にも生前から形成されていた「チーム・スターリン」は存続したのでは、との反応も寄せられたが、「チーム」とまで言えるほどの疑似家族的つながりが側近間にあったかどうかは疑問である旨、著者から応答があった。また、晩年のスターリンの判断能力をどう評価するかとの議論もなされた（著者は彼が政務に支障をきたすまでに衰えてはいなかったとみなしている）ほか、スターリン生前に形骸化していた共産党組織の回復についても描かれてしかるべきではないかとの指摘も出された。

報告者も和田書を読んだうえで参加したが、改めて、重要書であるとの感慨を強くした。本書は、質疑応答時に少し指摘されたユダヤ人問題や、科学技術政策の問題など若干の問題を除けば、伊東の指摘するようにこれ以上ないほど網羅的な精査に基づいており、河本も指摘するように、巧みな叙述によりそれが表出されている。もちろん、歴史記述においては叙述のあり方は単に「巧み」といってすまされるようなものではなく、書き手の歴史観とある面で不可分であり、そこが議論の対象ともなり得ようが、説得力を有した一貫した像を本書が与えてくれているのは間違いない。また、書評会に出席することで、改めて、日本語によるソ連史・冷戦史研究の層の厚さ、見識の多彩さと深み――少なくとも現時点における――に接することもできた。

（写真は 12 月例会の様子）

【ロシア史研究会 2 月例会報告要旨】

林忠行（京都女子大学）

# 革命期ロシアにおけるチェコスロヴァキア軍団－なぜ 1918 年 5 月の反乱は起きたのか－

（2017 年 2 月 18 日　於青山学院大学）

第一次世界大戦期にロシアで組織されたチェコスロヴァキア軍団は、1918 年 5 月末からシベリア横断鉄道沿線各都市でソヴィエト政権に対する武力反乱を起こし、それはロシア内戦の拡大と連合国の対ソ干渉戦争開始の契機となった。この報告では、これまでの様々な研究成果を整理する形で、この反乱にいたる過程を検討した。

軍団の前身となる部隊は、1914 年 10 月にキエフで編成を終えた。大戦勃発時にオーストリア・ハンガリー国籍を持っていたチェコ人移民がその中核を占め、そこには少数のスロヴァキア人移民も含まれていた。部隊はロシア帝国の保護の下でチェコスロヴァキア国家の形成を掲げていた。その背景にはネオスラヴ主義の影響が強く見られた。部隊は小隊ないし分隊規模でロシア軍の師団司令部に分属し、斥候として活動した。その後、戦争捕虜が加わり、1916 年 5 月には旅団規模の部隊となった。

ロシアのチェコ人、スロヴァキア人移民組織は親帝政派と反帝政派の間で対立があり、1917 年初頭にその対立は頂点に達したが、ロシア二月革命によって環境は後者に有利に転じ、西欧で独立運動を展開していたマサリクらの国民評議会がロシアでの指導権を得ることになった。同年末には 2 個師団からなる軍団となり、その後のロシアでの政治的、軍事的混乱の中で軍団は自立性を高め、ボリシェヴィキ革命後に、形式的にはフランス軍の指揮下におかれることになった。1918 年 3 月にロシアが独墺側と講話にいたると、軍団は戦うべき戦場を求めて、シベリア横断鉄道でウラジオストクに移動し、そこから海路で西部戦線へと移動することになった。

3 月末からペンザを起点に移動を開始するが、その過程で軍団とソヴィエト政権との対立が厳しさを増すことになる。連合国諸国間ではこの時期にロシアでの武力干渉計画が様々な形で議論されており、軍団の利用も考えられていたが、結局、連合国が干渉計画を議論している段階で軍団の反乱は始まり、それを契機に連合国の軍事干渉が始まったのである。

軍団とソヴィエト政権との武力衝突は、双方の行動がそれぞれの不信感を増幅させるという相互過程の結果であった。ソヴィエト側は、当時の日本軍やセミョーノフ軍などの動きを視野に入れながら、軍団の行動が反革命に結びつくことを警戒していたが、同時に、編成が始まっていた赤軍に軍団兵士が参加することを期待し、軍団兵士への宣伝工作を強め、軍団の移動を停止させた。他方、軍団指導部はボリシェヴィキ派の影響拡大を警戒し、また将兵の間では移動の停滞に関する不満が高まった。5 月後半にチェリャビンスクで開催された各部隊の代表者大会は、東方への前進を継続し、それが妨害される場合は武力行使も辞さないという決定を行い、その決定に基づいて 5 月末から反乱が始まった。

軍団の反乱事態は計画されたものではなかったが、当時の国際対立、ロシアの国内対立、軍団内の対立が共振を起こした結果であった。

**（写真は 2 月例会の様子）**

**【大会自由論題報告への交通費補助について】**

**例会交通費支給規程を準用し、大学院生等会員の研究活動を資金的に支援するため、遠方の会員（学振研究員を除く大学院生・非常勤）の自由論題報告に対し、交通費実費の片道分（上限有）を補助します。**

**ご希望の方は報告申込のメールに「交通費補助希望」と記入してお送りください。**

---
ロシア史研ニューズレター
第105号　2017年3月27日発行
編集･発行　ロシア史研究会委員会
（井上岳彦、立石洋子）
〒153-8902
東京都目黒区駒場3－8－1
東京大学大学院総合文化研究科
地域文化研究専攻　鶴見研究室気付
---